

松井大將と蒋介石の△云談

私は、松井石根大將のお供をして昭和十一年に中国に行きました。松井大將は退役後は、孫文の「大亜細亞主義」の理想を実現するため「大亜細亞協會」を創立し、その会長になりました。そして中国の蒋介石をはじめ西南シナの軍閥に会って、孫文の称えた『日本なくして中国なし、中国なくして日本なし』という、この日中和平の大義を確認するための旅行でした。松井大將はまず広東・広西に行き、孫文の第一の弟子である胡漢民や軍閥の李宋仁・白崇禧らと会いました。そして「南京の蒋介石と合体して統一した中国を作れ。蒋介石は米英と密着して排日・抗日・侮日を煽っているが、これを中止せしめて、『國父』孫文のいう日中和平の大義を実現しようではないか。」と説いて廻ったのです。

最後に松井大將は南京に蒋介石を訪ねました。大將は蒋介石が日本に留学したとき、下宿の世話までした間柄です。松井大將は南方の胡漢民ら軍閥と会ってきたことを説明し、「日中がいがみあうのは兄弟喧嘩と同じだ。白人どもはこれをけしかけて戦わせようとしているが、それにのせられてはならぬ。排日・抗日を煽るのをやめよ。日本の青年將校の暴走はわしの責任で食い止める。君も孫文の弟子なら、同じ弟子の胡漢民らと結んで、孫文の理想を生かそうではないか。」と口説きました。陳群という親日家の外務大臣や陸軍大臣の何應欣將軍も共に食卓を囲んで会談を二度重ねました。まことに和氣藹々たるものでした。松井大將はこの会談で「日中和平松井私案」なるものを起草して蒋介石に手交しました。私はその時の蒋介石と大將が二度三度固い握手をして別れを惜しんだ姿が、いまなおハッキリと眼に浮かびます。

大將が中国遊説を終えて帰国したのが、昭和十一年の四月でしたが、その年の十二月に起きたのが西安事件であります。蒋介石は周恩来が突きつけた六カ条の条件を呑んで身柄を釈放されます。その内容は要約しますと、①反共政策をやめて国共合作をはかれ ②南京政府を改組して各派を参加させ、親日閣僚を更迭せよ、という様なことあります。この西安事件が日支事変、いわゆる日中戦争の近因になったのです。